

# 戸建て住宅における団らん空間 ～京都・京北町の場合～ 家族の自立を可能にするための住居計画的な研究 (3)

北岡 依子・町田 玲子

## The Space of Family-communication in a House — in a Case of Keihoku-cho in Kyoto.

### A House-Planning Study for Establishing the Individual in the Family (3)

YORIKO KITAOKA and REIKO MACHIDA

**要旨：**本研究は、都市に隣接する過疎地における一戸建て住宅の団らん空間について考察することを目的とする。研究方法は、ヒアリング調査、アンケート調査によるものである。調査は京都府京北町において、2000年7月、および10月に実施した。結果は次の通りである。①住まいの重視要件のうち「家族団らん」と「プライバシー」に関しては、主婦と高校生の価値観に大差がみられた。②団らん空間の居心地と集まりやすさは相関関係にある。③団らん空間評価は、居間と食事室が隣接している場合、食事室と台所間に通路がある場合、玄関から子供部屋へは居間を通らずにいける場合、などに主婦の評価が高い。④希望の団らん空間で世代間格差が顕著にみられたタイプは、プライバシー確保型である。

若者世代の地域への定住をより可能にするためには、一戸建て住宅に対する重視意識や団らん空間に求める意識の異世代間隔差をいかに縮小するかが今後の課題と言える。若者世代が自立し、かつ地域に定住していくためには、プライバシー確保型団らん空間の具体的検討が望まれる。

(2001年9月12日受理)

## 1 緒言

家族が自宅で、時間や場所を日常的に共有でき、その状態に安らぎが感じられる場合、家族の団らんが確保されているといえる。しかし、今日では、ライフスタイルの多様化や「個」を重視する傾向などにより、団らんの確保は容易ではない。著者らは、快適な住生活を維持する条件の一つとして、家族の団らんと家族各々の自立との「両立」が必要であると考えた。

これまでの著者らの一連の研究では、台所の空間計画の見直しや、主婦の個人的生活空間の確保について行ってきた<sup>1) 2)</sup>。これらの研究において、生活の基本である家事労働を主婦など女性に依存せず、家族で行うこと（自立的行動）により、自宅で時間や場所を共にする機会が増えること、また、主婦自身の個室を確保することにより、主婦と他の家族が、場所や時間を共にする機会をつくり出そうとすることで団らんの質は高まる傾向があることを明らかにした。これらは、個人の生活的自

立を可能にすることが家族の団らんにいかに影響するか、という視点からの研究であった。

家族各々の自立と、家族の時間と場との共有は、相互に関係し合い、バランスよく保たれることが望ましい。では、団らん、つまり家族が場所や時間を共にしたいという意識を持続させるためには、住居計画上どのように考慮したらよieldろうか。

本研究では、若者層流出の問題を抱える地域を事例にとりあげ、若い世代が家族生活に魅力を感じる住まいの条件を団らん空間に注目して、住居計画的な考察を行うものである。団らん空間に関する研究については多くなされているが<sup>3) 10)</sup>、若者層の意識を含めて検討した既存研究例はないと思われる。

対象地域である京都府京北町では、地域活性化のために地場産材を用いた住宅建設が計画されている。京北町のような、都市部に隣接しているにもかかわらず人口の過疎化が進む地域では、若い世代が定住しやすい住環境づくりが求められる。若い世代が定住するためには、地

域産業の活性化、地元での就業機会の拡大や若い世代にとって魅力的な地域環境整備などの社会的な改善策が必要であるが、併せて、若者世代が住み続けたいと思える住宅供給も必要条件の一つとして考えられる。この地に相応しい住まいの条件を住み手の立場から提示することは、当地の活性化のためにも、また同様の過疎化傾向にある地域に対しても、今後の参考資料になるものと思われる。

なお、本研究における「家族の団らん」とは、親子または夫婦で同じ時間帯に同じ空間で過ごす場合をさし、「団らん空間」とは、居間だけでなく、食事室、台所も含まれるものとする。

## 2 研究の方法

### 2-1 ヒアリング調査の概要

京北町の若い世代のいる世帯を訪問し、家族の団らんや団らん空間等についての考えや意見を尋ねた。なお対象世帯の住宅は全て戸建て木造住宅に統一した。調査期間は2000年7月12日～13日。調査対象世帯は、黒田、周山、弓削、山国地区に住む計5世帯である。

### 2-2 アンケート調査の概要

京北町の6地区全てを調査の対象地とし、直接現地へ行って配布・回収を行った。平均回収率57%、有効回収数261を得た。アンケートには、各世帯の妻（主婦）に回答を依頼した。また、若い世代の意識を把握するため、地元の高校生を対象にアンケート調査を行った。高校生へのアンケート用紙の配布・回収は、高校の担任の教師を通じて行った。

調査期間は2000年10月8日～17日。配布・回収状況は表1に示すとおりである。

表1 アンケート調査の概要

	地区						高校生
	黒田	山国	弓削	周山	細野	宇津	
世帯(生徒)数	147	511	570	466	144	178	326
配布数	45	70	164	82	54	46	326
回収数	39	56	121	51	35	25	304
有効回収数	28	46	89	42	34	22	300
有効回収率	62%	66%	54%	51%	63%	48%	92%

## 3 調査結果および考察

### 3-1 調査対象地の概要

京都府の中東部に位置する京北町は、南東は京都市、西は八木町・日吉町、北は美山町にそれぞれ接し、町内は、黒田、弓削、山国、周山、細野、宇津の6地区に分



図1 京北町位置図

かれている(図1)。総面積は217.68km<sup>2</sup>で、府下町村で第2位の広さを誇り、その9割以上を森林が占めている<sup>1)</sup>。山の幸、川の幸に恵まれた豊かな自然環境と、多雨・多湿な気候とを生かした、磨き丸太をはじめとする特産物が多い。一方、中心産業である農林業などの従業者数は17.7%まで低減し、若者の他地域への流出や出生数の減少をもたらしている。65歳以上の人口の割合は25.6%を占め、24歳以下の人口割合(25.3%)を上回ってしまった今日、町は高齢化によって活力が低下することも懸念されている。町人口も7,116人であり、昭和30年(町合併当時)の人口の約65%まで減少している<sup>2)</sup>。

### 3-2 調査対象者の概要

家族構成は、子供のいる家族が46.6%、子供のいない家族が51.9%で、子供のいない家族については、ほぼ全て高齢者世帯であった。主婦の平均年齢は53.9歳であり、職業の有無については、専業主婦が45.3%、勤労主婦が51.3%であった。

高校生は、男子が50.3%、女子が49.7%で、ほぼ半数ずつに分かれていた。また、高校生のうち、京北町在住は52.7%で、京北町以外から通学している人は47.3%であった。

3-3 家族の囲らんに対する意識

家族の囲らんに対する意識の違いをみるために、住宅にとって大切だと思うことについて図2に示すように「その他」を含めた7項目の中から3つ選んでもらった。「家族が囲らんできる」の割合を主婦と高校生で比較すると、高校生は、「家族が囲らんできる」を選んだ主婦の約半数であり、逆に「プライバシーが保てる」は主婦の倍以上を占めている。つまり、高校生は家族の囲らんよりもプライバシー保持を重視しており、主婦は、プライバシーよりも家族の囲らんの方を重視している。以上、当町では住宅にとって大切だと思うことについては、世代による意識の違いがあることがわかった。

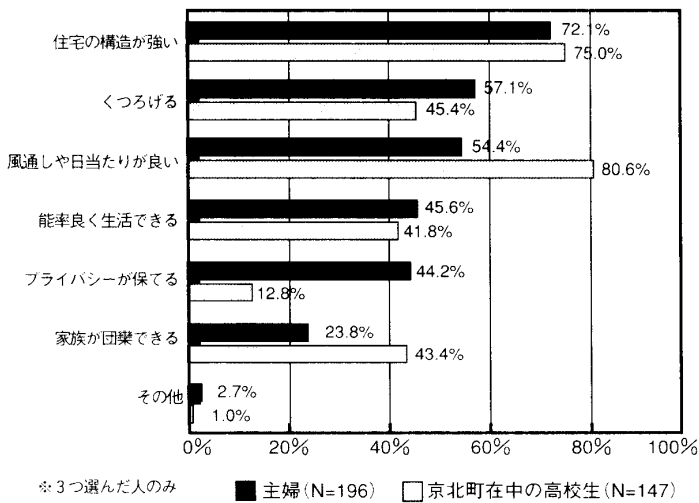


図2 住宅にとって大切なこと

3-4 囲らんの実態

囲らん内容の実態については、6項目の囲らん内容の選択肢を設け、主な2つを選んでもらった。その結果、もっとも高率の「食事をする」(84.7%)以外では、「TVを見る」(64.3%)、「世間話をする」(40.1%)が比較的高率である(図3)。図4は、朝、昼、晩、深夜の時間帯別囲らん実施率を、子供の有無別に加算して比較している。なお、6時~12時までを「朝」、12時~18時までを「昼」、18時~0時までを「晩」、0時~6時までを「深夜」として区分している。子どもの有無別に囲らんの時間帯を比較すると、休日はいずれも大差なく、平日は子どものいない世帯において囲らんの実施率が高く、しかも「朝」「昼」に囲らんする割合が高い。

家族との世間話を囲らん内容と考えている世帯は全体の4割であるが、子どもの有無別でみると子どものいない世帯で5割弱(図5)、主婦の就業の有無別では専業主婦が5割弱(図6)、時間帯別では平日の昼間が5割弱(図7)が、囲らん時の主な内容に「世間話をする」を選んでいる。子どものいる世帯では大半が食事やテレビが囲らん内容になっており、「世間話をする」は4分

の1足らず(図5)である。なかでも子どもが中高生の世帯では、家族との囲らん時に世間話をする割合はわずかに2割強であった(図8)。

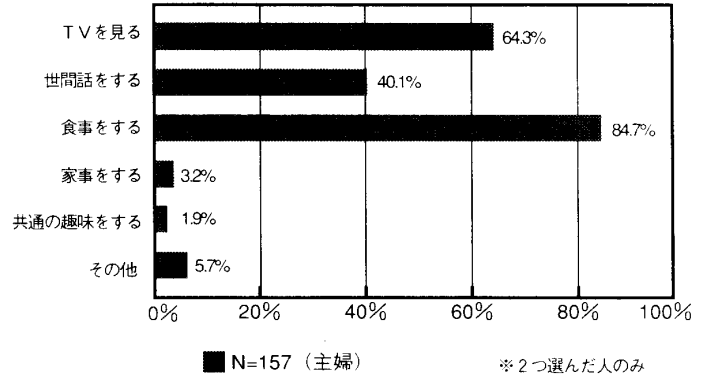


図3 囲らんの内容

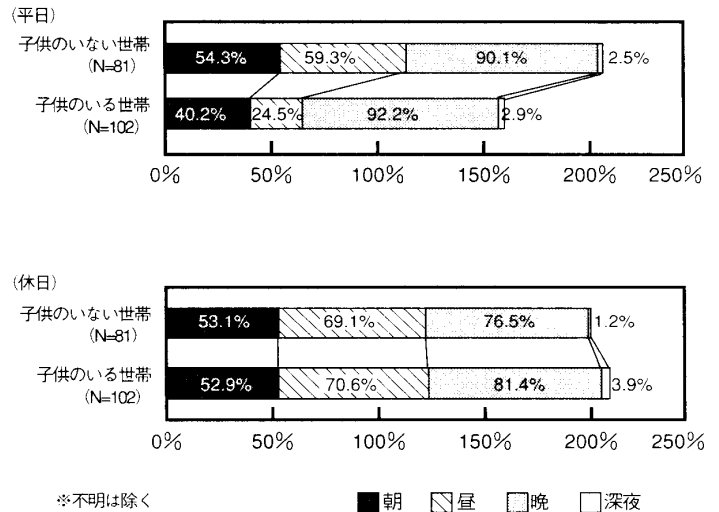


図4 囲らんの時間帯と家族構成との関係

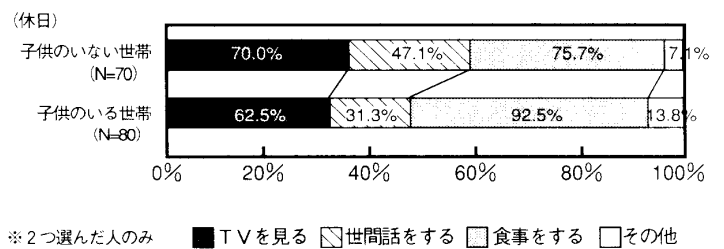


図5 囲らんの内容と家族構成との関係

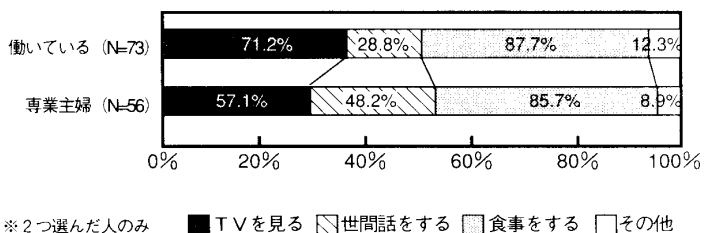


図6 囲らんの内容と主婦の職業との関係

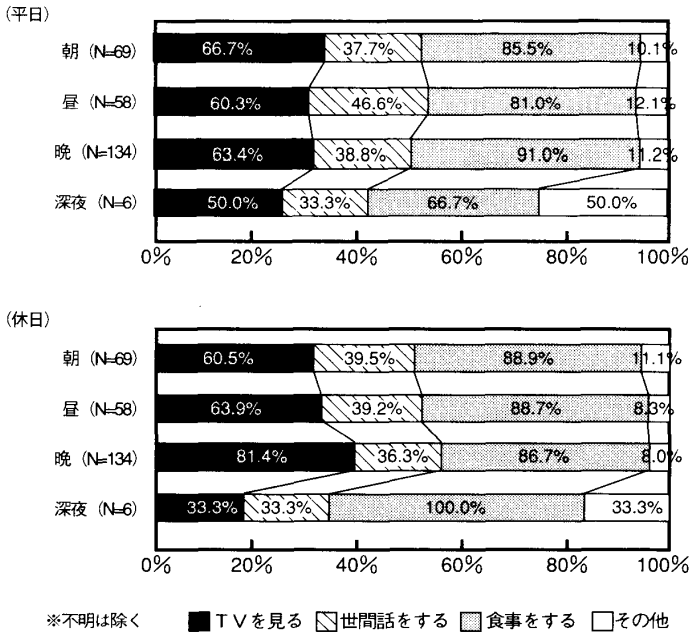


図7 団らの時間帯と団らの内容との関係

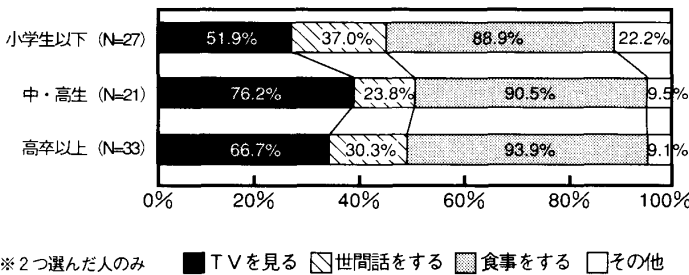


図8 団らの内容と長子の年代との関係

本研究は、若い世代と他世代とのコミュニケーションを高める手立てとして団らのための空間的条件を考えようとするものであるが、将来の生き方を考え始める年代の中高生のいる世帯で家族間の会話が少ないという上記の結果によって、本研究の問題意識の背景を再確認することができた。

3-5 団らん空間の実態と評価との関係

団らん空間における「家族の集まりやすさ」と「居心地の良さ」には相関関係がみられる(図9)。そこで、

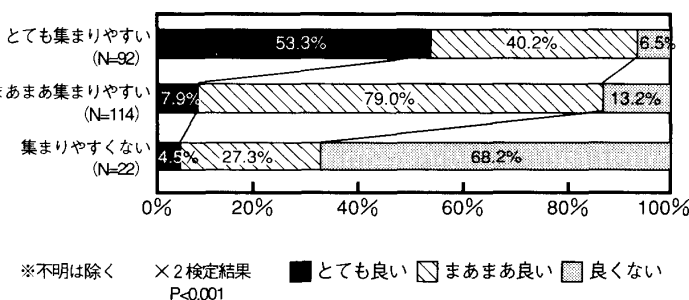


図9 団らの空間の集まりやすさと居心地

団らん空間の「家族の集まりやすさ」と「居心地の良さ」の各程度を組み合わせる評価段階を設定し、住宅の各室のつながり方と団らん空間評価との関連性を調べた。

3-5-1 評価方法 —— 団らん空間の「家族の集まりやすさ」と「居心地の良さ」の組合せは表2に示すように9通りあるが、①(高い-41.6%)、②(ふつう-39.5%)、③(低い-18.9%)の3段階にまとめた(%は、各段階の分布状況)。評価の比較を行いやすくするため①~③を点数化し、「高い」を10点、「ふつう」を5点、「低い」を0点として、世帯別の評価点を算出した。以下の3-5-2~3-5-6では、該当世帯数の評価点の合計を出し、それを当該合計世帯数で除して平均を出した結果を団らん空間評価の点数としている。

表2 居心地と集まりやすさの組合せ

	居心地 (%)		
	とても良い	まあまあ良い	良くない
とても集まりやすい (N=92)	① 21.5	① 16.2	③ 2.6
まあまあ集まりやすい (N=114)	① 3.9	② 39.5	③ 6.6
集まりやすい (N=22)	③ 0.4	③ 2.6	③ 6.7

\*①高い ②ふつう ③低い

3-5-2 居間と食事室 —— 居間と食事室のつながり方については、「隣に接している」世帯の割合(34.5%, 90/261)が高く、評価点も6.5点で、他の選択肢の中では高いほうである(図10)。居間と食事室が隣接している場合、両室の分け方と評価との関係を見ると、「分けていない」の評価が7.8で最も高くなっている(図11)。以上から、居間と食事室は、隣接し、明確に分けないで開放的であるほうが団らん空間としての評価が高いことがわかる。

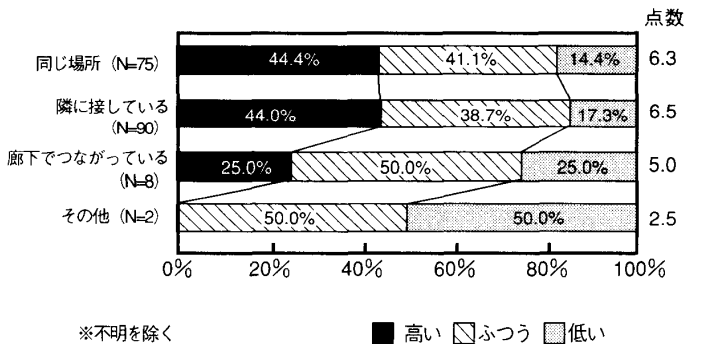


図10 居間と食事室のつながり方の実態と団らん空間評価との関係

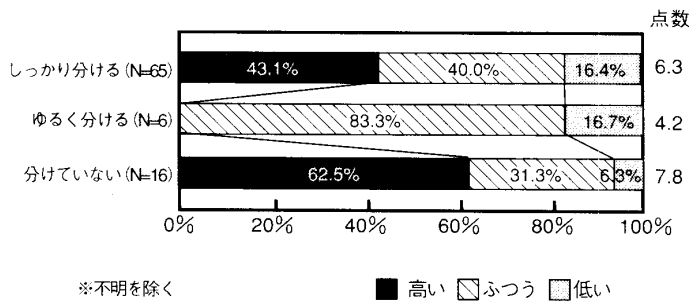


図11 居間と食事室の分け方の実態と囲らん空間評価との関係（居間と食事室が隣に接している場合のみ）

3-5-3 食事室と台所 —— 食事室と台所のつながり方については、「同じ場所」、つまりDKタイプの割合（28.7%、75/261）が高いが、評価は「廊下でつながっている」が9.0で最も高く、次いで「隣に接している」が7.0である（図12）。食事室と台所が「隣に接している」場合、両室の分け方と評価との関係は「しっかり分ける」と「分けていない」の評価がいずれも7.2で同程度に高い（図13）。以上から、食事室と台所は別室にし両室間には通路を設ける場合、または、食事室と台所が隣接していたとしても完全に間仕切るか、完全に開放してしまい、中途半端な間仕切りでない方が囲らん空間としての評価が高いことがわかる。

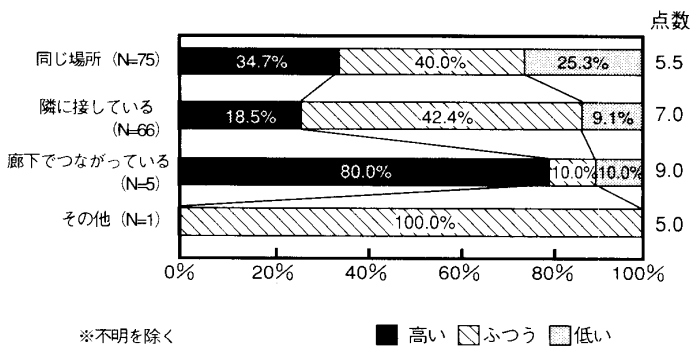


図12 食事室と台所のつながり方の実態と囲らん空間評価との関係

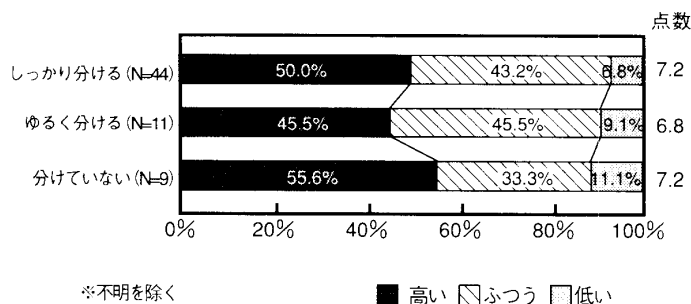


図13 食事室と台所の分け方の実態と囲らん空間評価との関係（食事室と台所が隣に接している場合のみ）

3-5-4 子供専用の部屋(以下、個室)との関係

—— 玄関から個室に行く際、居間を通るか通らないか、つまり玄関から個室への動線上の居間の状態と評価との関係を見ると、「居間を通らない」方が評価が6.3で高い（図14）。個室と居間のつながり方については、「階が異なる」世帯の割合（18.0%、47/261）が最も高いが、評価は「隣に接している」場合が7.0で最も高い（図15）。

個室と居間の「階が異なる」場合、両室が吹き抜けによって「つながっていない」世帯の割合（14.2%、37/261）が高く、評価も6.1で高い（図16）。また、居間と個室が「隣に接している」場合、両室間の仕切りは、カーテンや衝立より建具、建具より壁のほうが評価が高くなる（図17）。以上から、個室は玄関から居間を通らずに行ける場所にあり、同一階で近い場所に配置されていて、個室のプライバシーが十分保たれるようなつながり方の評価が高いと言える。

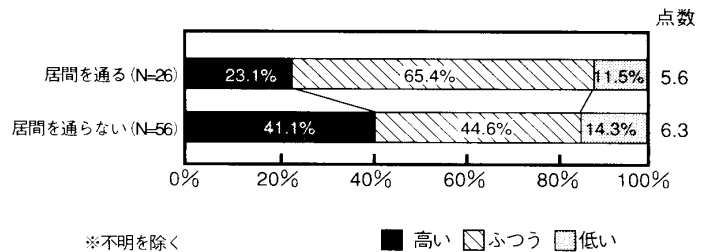


図14 玄関と個室のつながり方の実態と囲らん空間評価との関係

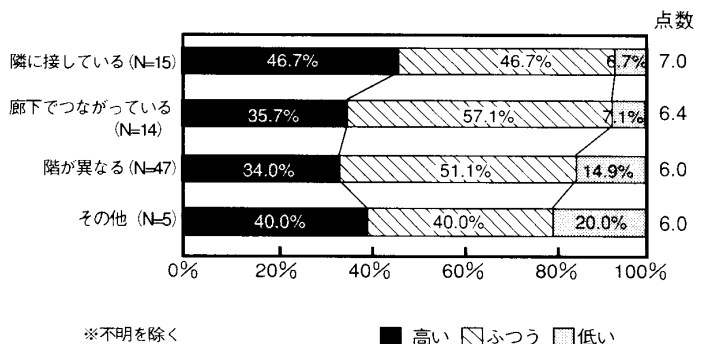


図15 個室と居間のつながり方の実態と囲らん空間評価との関係

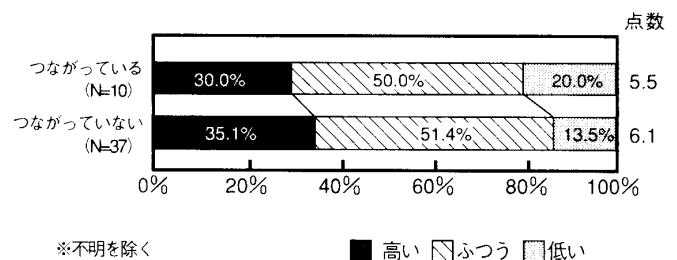


図16 吹き抜けでのつながり方の実態と囲らん空間評価との関係（個室と居間の階が異なる場合のみ）

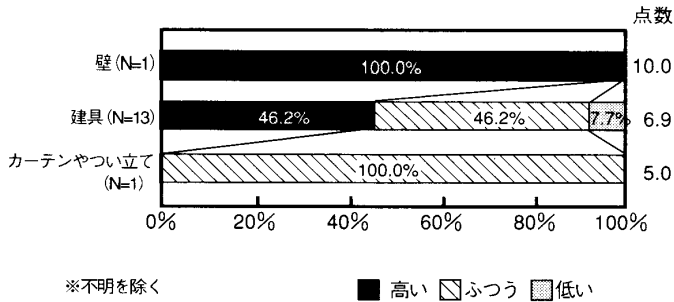


図17 個室と居間の分け方の実態と団らん空間評価との関係 (個室と居間が隣に接している場合のみ)

表3 団らん空間の起居様式と評価との関係

	(点)		
	若い世代 (20代・30代)	中年世代 (40代・50代)	高齢世代 (60歳以上)
和室・椅子座			7.5
和室・床座	5.5	5.8	6.2
和室・両方	7.5	5.6	7.9
洋室・椅子座	2.5	5.8	6.3
洋室・床座	8.3	5.0	
洋室・両方	7.9	5.0	10.0

3-5-5 広さ —— 団らん空間と広さとの関係を図18に示した。「居間兼食事室」における団らん空間評価の○(「高い」)が多く、12~16帖に集中している。以上から、居間と食事室は同一空間で、広さは狭すぎず広すぎず、14帖前後の場合、評価が高いと言える。

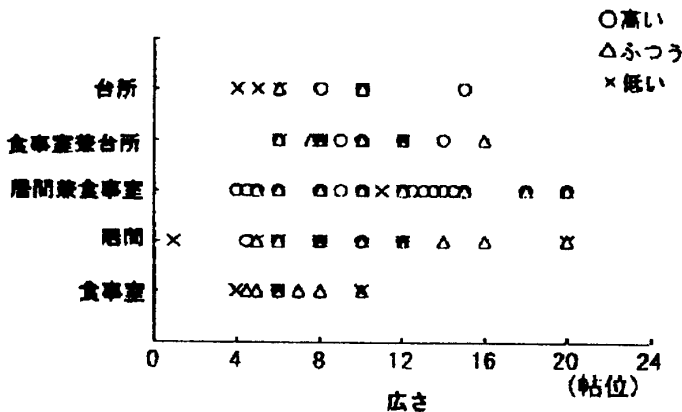


図18 団らん空間の広さと評価との関係

3-5-6 起居様式 —— 団らん空間の起居様式については、主婦の年代によって評価に違いがみられる。妻の年代が20代30代の場合は洋室で床座か、椅子座、床座両方の評価が高く、40代50代は和・洋、椅子座、床座に対して一様の評価をし、60代以上では和・洋に関わらず、椅子座、床座室の両方に評価が高くなっている(表3)。

3-6 団らん空間に対する希望

現在の家族の状態ですら団らん空間に望むことについて、図19に示すような項目の中から5つまで選んでもらい、主婦と高校生の、団らん空間に対する希望を調べた。その結果、高校生は「TVがある」に対する希望が最も多く、次いで「私空間とは分離されている」「日当たりや風通しが良い」が多い。一方、主婦は「日当たりや風通しが良い」に対する希望が最も多く、次いで「TVがある」が多い(図19)。

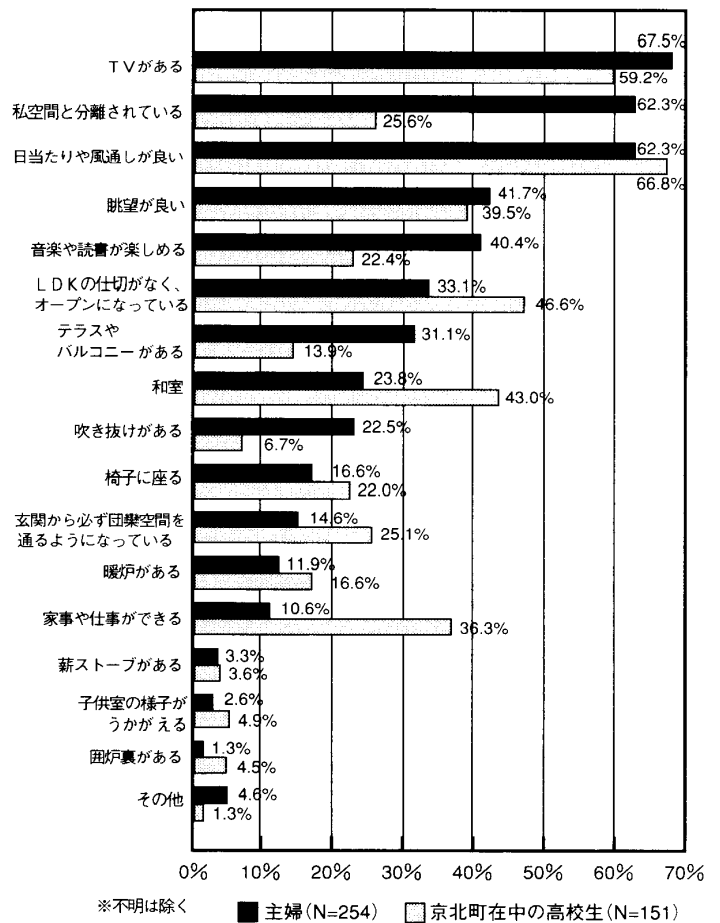


図19 団らん空間に対する希望

次に「その他」を除く16項目を6つのグループに分類し(表4)、主婦と高校生との比較を行なった。図20に示すように、主婦は「和風」「オープン型」が比較的高く、高校生は「プライバシー確保型」が主婦の2倍以上の割合になっている。団らん空間が「私的空間と分離されている」ことについての解釈には、①団らん空間の音・声・視線などによりプライバシーが侵されないように、②団らん空間を私的に使わなくてよいように、という2通りが考えられる。①は、「住宅にとって大切なこと」(図2)に関し、高校生は家族の団らんよりプラ

イバシーの方を重要視している結果からも推察されるように、団らんによって自分の生活を邪魔されたくない意識によるものであろう。②は、住宅に家族の私的空間が確保されていない場合、居間が個人的に使用されるためと思われる。とくに主婦のなかには、団らん空間に個人的趣味のものを広げるなど私物化する例がみられ、団ら

ん空間が他の家族にとって使いにくくなることも考えられる。

団らん空間に対する希望要件で、高校生の3分の2近くが「プライバシー確保型」を望んでいるにもかかわらず、主婦は4分の1しか望んでいないという両者の希望意識のちがいは、住居計画に、どのように考慮されるべきであろうか。

本研究では、最初に述べたように団らん空間を居間だけでなく、食事室、台所も含むものとしている。つまり、家族の団らん行為がどのような空間の状態であれば行なわれやすいか、という切り口で団らん空間のあり方を考えようとしている。したがって、団らん空間と他の住空間がどのように関わっているかという観点で、以上の結果を表5のようにまとめた。

家族構成は、子供の有無別、子供がいる家族については、長子の年代別（中学生以下・中高生・高卒以上）に分けて考えた。条件については、団らん空間と他室とのつながりに関するもの（LDKの形態、個室と団らん空間とのつながり）と、京北町特性（高齢者が多い、自然環境に恵まれている、冬期積雪があるなど）を反映できると思われる点（起居様式、外部空間取入、内部空間充実）に関して検討した。

表4 希望の分類

外部空間取り入れ型	室内空間充実型
・テラスやバルコニーがある ・日当たりや風通しが良い ・眺望が良い	・TVがある ・音楽や読書が楽しめる ・家事や仕事ができる
オープン型	プライバシー確保型
・吹き抜けがある ・LDKの仕切がなく、オープンになっている ・子供室の様子がうかがえる	・私空間と分離されている
和風	洋風
・和室 ・囲炉裏がある	・椅子に座る ・暖炉がある ・薪ストーブがある

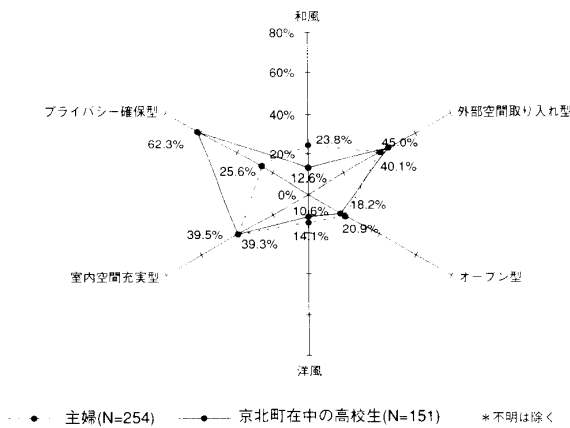


図20 希望の分類による主婦と高校生の比較

4 まとめ

本研究は、都市に隣接する過疎地における戸建ての団らん空間の実態を調べ、団らんしやすい空間計画について考察することを目的とする。調査対象地は京都府京北町である。調査は、2000年7月、および10月に実施した。結果は次の通りである。

- ① 「住宅にとって大切なこと」のうち「家族が団らんできる」と「プライバシーが保てる」に関しては、主婦と高校生に意識の差がみられる。
- ② 団らん内容の大半が食事・テレビであったが、子ども無しの世帯、主婦が無職の世帯では会話をしている割合が比較的高い。
- ③ 団らん空間の居心地と集まりやすさは相関関係にある。

表5 戸建て住宅における団らん空間の条件

	子供がいる			子供がいない (高齢者夫婦)
	中学生以下	中・高生	高校生以上	
LDの形態	LDK同一空間とする			LDは同一空間とし、 Kは完全に区分する
個室と団らん空間とのつながり	同じ階で近い場所に配置し、 団らん空間とは分離する			
起居様式	洋室・両方	和室・両方		和室・両方
外部空間取り入れ	○			○
室内空間充実				○

④ 団らん空間の評価点数は、居間と食事室が隣接している場合、食事室と台所が通路を隔てて配置されている場合、玄関から子供部屋へは居間を通らずにいける場合が高い。

⑤ 希望の団らん空間で世代間格差が顕著にみられたタイプは、プライバシー確保型である。

若者世代の地域への定住をより可能にするためには、団らん空間意識の異世代間隔差をいかに縮小するかが今後の課題と言える。

若者世代が生活的に自立し、かつ地域に定住するためには、プライバシーを尊重した住居計画が求められると同時に、何らかの作業をしながらでも家族の団らんが行われるような各空間のあり方や、表5に示すような条件の具体的な検討が望まれる。

### 謝 辞

本研究の調査は、京北町の皆様方のご理解やご協力のもとで実施することができました。とくに、ヒアリング調査にご協力いただいた方々、相談にのっていただき、貴重なご意見をいただきました京北町企画課の大東一仁様、京都府立北桑田高等学校の玄野敦雄校長先生はじめ諸先生方には大変お世話になりました。心から謝意を表します。

### 参考文献

- 1) 宮下綾子他、「コミュニケーション空間としての台所 家族の自立を可能にするための住居計画的研究 (1)」日本建築学会近畿支部研究報告集, 1995
- 2) 寺田純子他、「主婦の個人的空間 家族の自立を可能にするための住居計画的研究 (2)」日本建築学会近畿支部研究報告集, 1995
- 3) 宇野浩三他、「北海道の住宅の公室空間に関する研究 — その1. 空間形態の詳細分析 —」日本建築学会学術講演梗概集, 1989
- 4) 小室晴陽他、「北海道の住宅の公室空間に関する研究 — その2. 生活形態の詳細分析 —」日本建築学会学術講演梗概集, 1989
- 5) 中西真弓他、「公室に関する基礎的研究 その1. LDKの構成について」日本建築学会学術講演梗概集, 1989
- 6) 中西さゆり他、「公室に関する基礎的研究 その2. だんらん室の様式について」日本建築学会学術講演梗概集, 1989.
- 7) 江上徹他、「住居に於けるコミュニケーション空間に関する研究 その1」日本建築学会学術講演梗概集, 1991
- 8) 丸野穰治他、「住居に於けるコミュニケーション空間に関する研究 その2」日本建築学会学術講演梗概集, 1996
- 9) 野口孝博他、「住宅の平面型とL, D, Kを中心とする公室空間の形態 北海道の戸建住宅の近年の変貌動向に関する研究 — 住宅金融公庫融資住宅平面の分析 (I) —」日本建築学会計画系論文集No.470, 1995
- 10) 宇野浩三、「戸建住宅における公室生活形態の展開過程 北海道の住宅の発展に関する空間論的研究 (2)」日本建築学会計画系論文集No.478, 1995
- 11) 京北町統計書 (平成10年度版, 平成11年3月発行)
- 12) 東洋経済新報社「地域経済総覧2001」より